部活の健康度を測る

太　田　　仁*・西　田　公　昭**・尾　見　康　博***・諏　訪　舞　香****

Development of a Bukatsu Health Measuring Scale

Jin OTA, Kimiaki NISHIDA, Yasuhiro OMI, and Maika SUWA

要　旨

部活は，学校適応や諸活動に対する意欲と関連しており）部活に所属する中学生・高校生の実生活や意識の中心にある（狩野･田崎，1990）[2]。しかしながら，度重なる文科省等による指導にもかかわらず，部活内でのいじめ，それに起因する不登校や退学，自殺に至るまで深刻な問題は後を絶たない。

本研究は研究Ⅰで部活の不合理な指導について「顧問による威圧的支配」「私生活の剥奪とその苦痛」「権力濫用」「全体主義的風潮」の4つの構造を明らかにし，研究Ⅱでは，部活の学校生活への有用性に着目し「部活の成果」「顧問の指導力」「チームワーク」「強制圧力」「開放性」の5因子から成る，部活の健康度尺度を作成した。その妥当性については，「向社会的スキル」「集団活動スキル」「学習スキル」の3側面との関連性を検討した結果，運動部では，「部活の成果」･「チームワーク」について向社会的スキルおよび学習スキルとの間に有意な相関が示された。文化部では，「部活の成果」について向社会的スキルおよび集団活動スキルとの間に有意な関連性を見出した。

キーワード：部活，顧問による人権の侵害，チームワーク，部活の健康度尺度

Ⅰ　問　題

学校教育の機能の一つに，児童生徒集団による社会化がある。具体的には，文部科学大臣が公示する学校教育における教育課程の基準である学習指導要領には，以下の通り示されている。

「望ましい集団活動を通して，心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り，集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的な態度を育てるとともに，人間としての生き方についての自覚を深め，自己を生かす能力を養う（文部科学省，平成29年（2017））[1]

学校において生徒の意欲に重大な影響を与える集団活動は，学級集団における活動だけではない。教育課程外ではあるが多くの生徒が参加する部活動集団は，学校適応や諸活動に対する意欲と関連しており（狩野・田崎，1990）[2]，生徒自身らの興味に沿った自主選択による活動として，

2022年9月14日受理
*社会学部心理学科教授・**立正大学大学院心理学研究科教授
***山梨大学大学院総合研究部教育学域教授
****家族社会心理学研究所研究員

依然，中学生・高校生の実生活や意識の中心にある。

部活動は生徒個人の学校生活への適応にも重要な影響を与えることから平成 20 年（2008）の「中学校学習指導要領」[3]の総則に「生徒の自主的，自発的な参加により行われる部活動については，スポーツや文化及び科学等に親しませ，学習意欲の向上や責任感，連帯感の涵養等に資するものであり，学校教育の一環として，教育課程との関連が図られるよう留意すること。その他，地域や学校の実態に応じ，地域の人々の協力，社会教育施設や社会教育関係団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。」とその指導指針を示している。続く平成 30 年（2017）中学校学習指導要領 第 1 章 総則 第 4 の 2「生きる力」[4]にも「クラブ活動を通して，望ましい人間関係を形成し，個性の伸長を図り，集団の一員として協力してよりよいクラブづくりに参画しようとする自主的，実践的な態度を育てる。」とその集団内の健全な対人関係や集団運営にまで踏み込んだ活動指針が示されている。

人は，集団や社会の容認する行動様式を取り入れることによって，その集団や社会に適応することを学ぶ。この社会化の過程は，学習により実現される。個人は，他者との相互作用を通して，行動の仕方，ものの考え方，または感情の表出や統制の仕方を学習する。自立を目指し家族から仲間集団へその準拠集団が移行する時期にある中学生・高校生にとって部活集団は学級集団と並び生徒たちの社会的態度の形成に重大な影響を与えると考えられる。

しかし，「ブラック部活」（内田，2017）[5]の指摘など上記の学習指導要領等が示す部活動とは逆方向のベクトルの存在が指摘され社会問題となっている。

日本スポーツ振興センター（平成 28（2018））[6]の報告では学校における事故は 2014-2016 年度，年間平均で約 35 万件としている。その内訳は小学校 8,000 件，中学校 187,000 件，高校 156,000 となっており中学・高校で多く，特に部員数の多いバスケットボール，サッカー，野球の順で事故が多発している。生命の危機に直結する重大な事故である頭のけがは年間約 12，000 件に上り，野球 , サッカー，バスケットボールの順になっており部活動が危険因子の顕現性が高く，特に指導者の安全への意識や専門性さらには，集団特性を理解した指導が求められているといえよう。

海外の課外スポーツの実態と比較しながら，日本の部活の特徴を指摘した尾見（2019）[7]は，日本の「部活」の問題を「勝利至上主義」,「気持ち主義」「一途主義」「減点主義」に 4 分割し日本文化に潜在する価値観の悪影響を指摘している。また，石村・田里（2017）[8]は，部活の「閉鎖的な環境」「絶対的な「上下関係」「妥協と体罰の再解釈」「勝利（目的達成）の追求」「集団への帰属意識」の 5 つの側面を指摘し部活とカルト集団の類似性を指摘している。

部活の問題点を踏まえたガイドラインは，文部科学省（平成 25 年 2013）[9]やスポーツ庁（平成 30 年 2018 年）[10]が不合理な指導の実態を改善すべく警鐘を鳴らしているがその後も悲惨な事件は起こっている。たとえば，愛知県で 2018 年に市立中学 1 年の斎藤華子さん（当時 13 歳）がソフトテニス部で同年 11 月頃から同部で無視されるなどのいじめを受け 18 年 1 月に自殺した事件[11]。2018 年に三重県立高校 1 年の男子生徒（当時 16）が自殺した事件では，自殺した男子生徒は部活で上級生から身体をたたかれたり，部活の LINE グループで人格を否定するような言葉を投稿されたりしており県教育委員会の第三者委員会も LINE でのやりとりなど 6 件について，自殺と因果関係が認められるいじめと認定した事件[12]など部活の不健全体質は依然と改善され

ず，そのことに起因する問題や犠牲者も後を絶たない現状がある。

指導者による専制的で威圧的な支配は，日常の学校生活や学校外での生活にまで及び，全体主義的な集団規範は個人の意向や人権感覚を麻痺させ脱個人化による「いじめ」が不登校，退学，自殺といった深刻な事態の要因となっていることが伺われる（いじめ等問題行動の実数については注 1 参照）。

長谷川（2013）[13] は，1754 名の大学生を対象とした高校部活動に関する回顧調査において指導者の問題行動（部員に対する暴力）と生徒（部員）の問題行動（部員同士の暴力，いじめ）の発生状況について指導者の暴力と，上級生から下級生への暴力，同級生同士のいじめが，運動部のうち，特に団体競技の部活動において発生する確率が高いことを明らかにしている。また，活動日数については週 6 日ないしは 7 日において暴力やいじめの発生割合が高いこと，放課後や休日において多くの時間を練習や試合，大会などに割いている部活動ほど，部活動における問題行動が発生しやすいこと，そして全国大会など実績を残している部活動ほど，指導者の暴力が発生する割合が統計的に有意に高いことが指摘されている。

部活集団でのいじめ等の問題行動は本来問題行動を予防し，矯正すべき立場にある指導教員や他学年（主に先輩・後輩）による階層的支配による専制的な規範に起因し，そういった規範に忍従することでメンバーシップが獲得できるといった錯誤によるものも少なくないことから学級集団における暴力行為やいじめと異なり，事実を認定しにくい側面がある。

特に，団体競技などでは，個人の都合より集団の論理が優先されることが社会的に未熟な中学生高校生に「チームワーク」と誤認されることもある。チームワークは，「チーム全体の目標達成に必要な協働作業を支え，促進するためにメンバー間で交わされる対人的相互作用であり，その行動の基礎となる心理的変数を含む概念である」（山口，2008）[14] と定義されており，その態度的要素として，凝集性（cohesiveness），チーム効力感（team efficacy），相互信頼感（mutual trust），心理的安全性（psychological safety）などが挙げられる（Rousseau et al., 2006）[15]。そこには，不健全な部活指導にみられる同調圧力による専制的な支配によるメンバーの支配や個人の価値に優先する集団目標は無い。

集団の健康度について西田（2009）[16] は「集団が，メンバーの獲得・維持・管理の側面，集団活動状況の側面において，法的ならびに道徳的な規範をどの程度順守しているかを意味している」と定義し，個人が所属する集団健康度のチェックにより多様なハラスメントなどの人権侵害や差別，独裁的運営，リーダーの背任行為，ミスやリスクの隠蔽などの社会規範からの逸脱といった不健全問題の所在に警鐘を鳴らす意義があるとしている。

以上からこれまでの「部活」関する問題については，事例的検討が中心であった。しかしながら不合理な指導や部活内いじめにより自殺に至る重大事件や部活の退部が退学や転校につながる深刻な問題の生起を予知する指標についての精査は十分に行われていない。

以上から研究Ⅰでは，現役の教師や養護教諭，大学生の部活経験者への広範囲の聞き取りをもとに部活の不合理指導実態を明らかにする。

研究Ⅱでは，部活動の健全性を測るため，研究Ⅰで得た情報をさらに精選し，部活動の多様な側面を測定する尺度を作成し，学校生活への適応との関連性を検討する。

II 研究 Ⅰ

研究Ⅰでは,「部活」で現実に生起している「問題」の実態を把握し，その諸相をあきらかにするため，面接調査による実態把握とそこで得られた情報による部活動における不合理さをチェックする指標とその構造を明らかにすることを目的とした。

1. 方 法

項目収集；2018 年 4 月～ 9 月大学 1 年～ 3 年生部活経験者 27 名に対する活動における実体験の聴き取りに加え私立中・高校の教諭 7 名，養護教諭 1 名，公立高校教諭 7 名，養護教諭 1 名からの生徒の部活に関する悩み相談等の情報提供を得る。2018 年 9 月～ 12 月得た情報を基に「部活」における問題事象の 102 項目の評定項目を作成し，筆者らにより統合分割の結果，部活の健康度に関する質問項目 61 項目を選定した。

項目の妥当性の検討；2019 年 4 月 -6 月東海地区の大学生 175 名，関西の大学生 87 名，合計 262 名を対象に項目収集で得た 61 項目大学の講義時間を利用して教室に留め置き，質問紙法にて中学あるいは高校での部活動経験に関して，5 件法にて回答を求め回答終了後回収した。回答に不備が認められた 50 名を除外し，212 名を分析対象とした。

2. 結果と考察

各項目の平均・標準偏差を算出した（表 1)。部活についての不合理な指導に関する回答の構造を明らかにするために因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。因子分析の過程で複数の因子に負荷する 15 項目を削除し，最終的に 46 項目を対象に因子分析をおこなった（表 1)。

固有値の変化から 4 因子を抽出した。第 1 因子は,「60. こんなことはしてはいけないと思っても顧問の指示に逆らえない自分が嫌だった。」「38. 決まりに従わない部員がいないかを部員相互で監視させられていた。」「45. 顧問は部員の個人的秘密を守らないことがあった。」など 21 項目から構成されており，部活顧問から不当な支配により人権が侵害されている状況を示していることから「威圧的支配」と命名した。

第 2 因子は,「1. 本来の勉学をもっとしたかったが, 部活を優先しなくてはならなかった。」「28. 過酷な部活のため心身ともに疲れ果てていることが多かった。」「35. 部活の休日が少なすぎだと思っていた。」など 10 項目から構成されており，部活に参加することが最優先され学校生活における主幹である学習時間そのものや個人の余暇が圧迫され，学習に取り組む意欲が減退するほどにまで部活への傾注を求められる状況から「私生活の剥奪とその苦痛」と命名した。

第 3 因子は,「29. 部員の個人的発達や特性を考慮せず，一斉に指示された。」「15. 顧問は，部員の活動を不当に低く評価をしていた。」「6. 顧問は，本来の部活動には関係ない雑用や私用を強制することがあった。」などの 11 項目から構成されており，顧問による部活動指導にあたって部活動指導の正当な範囲を逸脱し，正当な指導や部活動顧問権利の行使とは認められない状況から「権力濫用」と命名した。

第 4 因子は，「56. 顧問や先輩の指示には絶対に従わなければならなかった。」「2. 校則や部活のルール違反者がでると，連帯責任として全員で罰則を受けた。」「22. 自分のミスや技能不足で部活にみんなに迷惑をかけていると叱られた。」など顧問が生徒の個人の自由や社会集団の自律性を認めず，個人の権利や利益を部活の利害と一致するように統制が行われている状況から「全体主義」と命名した。各因子の α 係数は，.940-.710 の間で示された。

結果から，「2. 顧問や先輩の指示には絶対に従わなければならなかった。」「試合や発表会などの部員選抜では，顧問が部員の意見を聞くことなく決めていた。」の 2 項目は，中央値の 2.5 を上回っていたがその他の項目について，天井効果（平均値に 1SD を加えた際に最大値（5）を超える項目）および床効果（平均値に 1SD を減じた際に最小値（1）を下回る項目）が見られるか否かを確認した。その結果，天井効果は確認されなかったが上記 2 項目以外の項目は最小値（1）を下回っており，多くの項目で床効果が確認された。しかしながら，これらの項目は，部活における生徒たちの実体験を反映している。そのことが投影されるように，中学・高校での部活への参加率は，年々減少しており。いわゆる帰宅部（放課後の部活動が強制でなく「任意」とされている学校で，どの部にも所属しないまま帰宅する生徒たちの呼称）が増加しており（スポーツ庁，30 年平成（2018）[17]・国立青少年教育振興機構，平成 26 年（2014））[18]。部活のあり方は多方面から検討されており，スポーツ庁（2018 年）[19] の部活指針を反映し，運動能力や競技力の向上を第一とする運動部活動では，障がいのある生徒や運動が苦手な生徒などの要求に応えられないことを踏まえ，部活動の多様化を目指す考えに基づいた「ゆる部活（競技志向ではなく，友人たちと適度な頻度で楽しく活動できる中学校・高校の運動部活動のこと。）」[20] の広がりを見せている。一方過去の戦績で優勝経験が多い強豪校の部活では，そういった転換は難しい状況がある。

今回の調査で明らかにされたように，生徒の個々の事情や家庭状況を無視した顧問による全体主義的な指導や支配は，スポーツ格差を産むといった実証的研究もある（清水ら，2021）[21]。以上からも，今回の調査で明らかにされた部活におけるの不合理な指導に警鐘を鳴らす有用な視点を与えているといえよう。

III　研究　Ⅱ

部活の生徒への影響は研究Ⅰで明らかにされた集団活動における負の側面だけではない。部活動への参加は友人関係を形成しやすく（岡田，2009）[22] その関係や関係を通じて得たソーシャルスキルは部活外の学校生活での児童・生徒との関係にも適用される（坂西，1993）[23]。そして部活の満足感は学校生活全体への満足感の高さと関連する（吉村，1997）[24] ことや，部活での積極性は学業コンピテンスや学校生活の満足度を高め，学校生活満足度がより高くなる（角谷，2005）[25] などその有用性を示す研究結果も少なくない。

研究Ⅰで示された部活について顧問の指導性の問題が少なくないことや顧問を担当する教員の専門性や過重な負担についても問題となっていた（e.g. 内田，2017）[26] ことから部活動指導員が制度化されたり（スポーツ庁，2017）[27] 前掲の「ゆる部活」であったり生徒の参加方法も多様化するなど部活は岐路にある。

表 1　部活で不合理を感じた経験（高得点順）

番号	質問項目	平均値	標準偏差
2	顧問や先輩の指示には絶対に従わなければならなかった。	2.74	1.268
1	試合や発表会などの部員選抜では、顧問が部員の意見を聞くことなく決めていた。	2.74	1.355
20	部活の休日が少なすぎだと思っていた。	2.42	1.446
11	返事をするときなどは全員で声をそろえたり、独特の言い回しがあったり、軍隊のようなルールがあった。	2.33	1.358
26	部活によって精神的に追い込まれ心のバランスを崩す人がいた。	2.29	1.338
29	顧問は部員によって、えこひいきをしていた。	2.20	1.274
39	部活のための費用がかかって、家族の負担になっていた。	2.20	1.276
8	顧問の指導や部活の考え方や指示に対して、納得のいかないことが多かった。	2.19	1.185
15	部活動をすることが最も大切なことで、そのためにはほかの色々なことを犠牲にしなくてはならなかった。	2.18	1.264
3	部活で自分がやりたい内容や役割があっても自分の意思で選ばせてもらえなかった。	2.15	1.025
6	顧問や先輩の指導や指示がおかしいと思っても、その思いを言うと、その後の部活で不利益を被りそうだった。	2.12	1.181
25	過酷な部活のため心身ともに疲れ果てていることが多かった。	2.06	1.327
19	校則や部活のルール違反者がでると、連帯責任として全員で罰則を受けた。	1.99	1.324
56	自分のミスや技能不足で部活のみんなに迷惑をかけていると叱られた。	1.93	1.306
45	顧問は、大声で怒鳴ったり、暴力などで部員を怖がらせていた。	1.86	1.264
24	他の部員に、私物を勝手に利用されることがあった。	1.85	1.115
31	部活の終わり時刻が遅くなっても、帰路の安全配慮がなかった。	1.84	1.064
5	部活をしてない生徒に対して冷たい先生がいた。	1.84	1.036
43	自分の本心は部活内では怖くて言えなかった。	1.83	1.113
37	家族に相談する前に高額なジャージや部活用品の購入が決定される。	1.83	1.131
22	決まりに従わない部員がいないかを部員相互で監視させられていた。	1.82	1.241
32	本来の勉学をもっとしたかったが、部活を優先しなくてはならなかった。	1.81	1.161
36	顧問は、部活内でいじめや、もめ事があっても知らないふりをした。	1.77	1.114
34	過酷な部活のせいで心身を害しても、自己責任にされた。	1.76	1.185
12	顧問は部員の個人の意見はわがままと見なして軽視された。	1.76	.931
35	顧問は部員の個人的秘密を守らないことがあった。	1.75	1.104
27	部活の成果がよくないと、長時間、執拗に顧問に叱られたり、反省を求められたりした。	1.75	1.165
60	こんなことはしてはいけないと思っても顧問の指示に逆らえない自分が嫌だった。	1.74	1.254
10	部員の個人的発達や特性を考慮せず、一斉に指示された。	1.73	.948
42	顧問や部で、責められるときは、弁明・反論できる機会が十分に与えられない。	1.73	.993
7	顧問は、本来の部活動には関係ない雑用や私用を強制することがあった。	1.72	1.007
33	身体の不調や病気のときでも、部活を休む許可や医師にかかる許可をもらいにくかった。	1.71	1.117
58	自分だけ特別扱いされて他の人に申し訳なかった。	1.69	1.089
28	部活で学校が嫌になり、不登校になったり、退学した人がいた。	1.68	1.110
9	顧問は、部員の活動を不当に低く評価をしていた。	1.68	.939
24	部活の辛さや問題点は、親などの部外の人にはわかってもらえないので、ひとりで耐えなければならなかった。	1.68	1.012
30	部活を辞めると、顧問だけでなく部員からも無視されたり冷たくされたりした。	1.67	1.036
16	部活以外の生活スケジュールや活動も、顧問によって管理されたり、干渉されたりした。	1.67	1.073
41	入部時には、良い点ばかりを強調して、実際の不都合なことを隠して説明があった。	1.61	.969
13	家族は部活の方針を受容して批判せず、顧問の指示指導や活動を全面的に支持・協力しなければならなかった。	1.61	.861
4	家族や部外者には、部活関係の事柄を相談させてもらえなかった。	1.60	1.005
59	顧問や先輩の言うとおりにしないと、試合に出してもらえなかった。	1.58	1.034
61	顧問や先輩からきつくあたられている人がいても自分がそうなるのが怖くてかばえなかった。	1.54	.987
14	部活でおかしいと思うことがあっても、家族や他の部の人に言わないように指導されていた。	1.52	.884
47	顧問に怒鳴られたり、殴られたり、蹴られたりなどの暴力を自分や他の部員が受けた。	1.52	1.019
17	個人的に秘密にしておきたいことでも顧問には明かさなければならなかった。	1.50	1.091
46	いつも部活で顧問に怒鳴られてばかりいるため、部活の時間以外で顧問の顔を見たり思い出したときでも怖くなった。	1.46	.925
38	個人で購入した部活用品なのに辞める時や引退の時は、部に寄付させられた。	1.42	.790
54	部活動のために、文化祭や町のイベントで資金集めをさせられた。	1.42	.881
57	退部したいと言う部員には、部員全員で囲んだり、自宅まで押しかけて辞めないように圧力をかけたり強制したりした。	1.42	.977
49	部活でひどい目にあっても、部活以外に居場所がなかった。	1.41	.848
59	自分や他の部員が、顧問に人格的に否定されたり、執拗に罵られたり、侮辱されたりした。	1.41	.879
18	下手な同学年や後輩にきつく当たって罪悪感を感じていた。	1.40	.800
48	部員は、その活動以外のときでも、部員と一緒に行動しないといけなかった。	1.39	.743
55	指導内容に疑義がでていることが顧問に伝わると、その中心人物が探し出され徹底的に叱られた。	1.39	.844
50	顧問は部活動を辞めようとすると、内申書への負の影響をちらつかせて辞めさせないようにした。	1.39	.882
52	顧問が自分や他の部員に性的な嫌悪を感じさせる発言や行為をしていた。	1.38	.913
44	顧問は、従順でない部員には、脅迫めいた口調で指示していた。	1.36	.744
21	学校生活で、部員以外の人々と自由に話をする機会はほとんどえられなかった。	1.28	.690
51	自分や他の特定の部員に対して、顧問に不必要に体を密着させたり触ったりされたり、他の人がされたりした。	1.18	.643
53	顧問が特定の部員にセクシャルな関係をせまっていた。	1.12	.528

n=212 min=1 max=5

表 2　部活での不合理な経験　因子分析結果と平均・標準偏差

項目番号	項　目	因子 威圧的支配 α =.941	私生活の剥奪とその苦痛 α =.917	権力濫用 α =.880	全体主義的風潮 α =.710	mean	S D
60	こんなことはしてはいけないと思っても顧問の指示に逆らえない自分が嫌だった。	.955	−.211	−.168	−.049	1.74	1.254
38	決まりに従わない部員がいないかを部員相互で監視させられていた。	.915	−.192	−.131	−.030	1.82	1.241
45	顧問は部員の個人的秘密を守らないことがあった。	.883	−.084	−.028	−.182	1.75	1.104
25	自分だけ特別扱いされて他の人に申し訳なかった。	.802	−.255	.104	−.049	1.69	1.089
14	部活でおかしいと思うことがあっても、家族や他の部の人に言わないように指導されていた。	.747	−.194	.103	.062	1.52	.884
58	他の部員に、私物を勝手に利用されることがあった。	.708	−.048	−.096	.032	1.85	1.115
55	部活のための費用がかかって、家族の負担になっていた。	.643	.271	−.221	−.123	2.20	1.276
33	顧問は、大声で怒鳴ったり、暴力などで部員を怖がらせていた。	.637	−.088	.147	.189	1.86	1.264
39	顧問は、部活内でいじめや、もめ事があっても知らないふりをした。	.609	.196	.190	−.223	1.77	1.114
61	顧問や先輩の言うとおりにしないと、試合に出してもらえなかった。	.591	−.026	−.128	.418	1.50	.973
47	顧問や先輩からきつくあたられている人がいても自分がそうなるのが怖くてかばえなかった。	.589	−.046	−.028	.283	1.54	.987
40	個人的に秘密にしておきたいことでも顧問には明かさなければならなかった。	.520	−.043	.028	−.050	1.50	1.091
26	部活以外の生活スケジュールや活動も、顧問によって管理されたり、干渉されたりした。	.506	.225	.063	.014	1.67	1.073
19	顧問に怒鳴られたり、殴られたり、蹴られたりなどの暴力を自分や他の部員が受けた。	.500	.098	.053	.242	1.67	1.073
4	家族に相談する前に高額なジャージや部活用品の購入が決定される。	.480	.190	.273	−.093	1.83	1.131
42	家族や部外者には、部活関係の事柄を相談させてもらえなかった。	.467	−.098	.317	.115	1.60	1.005
27	部活を辞めると、顧問だけでなく部員からも無視されたり冷たくされたりした。	.454	.327	.245	−.067	1.67	1.036
30	部活の辛さや問題点は、親などの部外の人にはわかってもらえないので、ひとりで耐えなければならなかった。	.452	.195	.091	−.014	1.68	1.012
31	部活で学校が嫌になり、不登校になったり、退学した人がいた。	.445	.204	−.147	.207	1.68	1.110
12	部活の成果がよくないと、長時間、執拗に顧問に叱られたり、反省を求められたりした。	.358	.301	−.094	.261	1.75	1.165
20	試合や発表会などの部員選抜では、顧問が部員の意見を聞くことなく決めていた。	.315	−.057	.128	.163	2.74	1.355
1	本来の勉学をもっとしたかったが、部活を優先しなくてはならなかった。	−.130	.968	−.009	−.161	1.81	1.161
28	過酷な部活のため心身ともに疲れ果てていることが多かった。	−.281	.834	−.069	.251	1.76	1.185
35	部活の休日が少なすぎだと思っていた。	−.412	.804	.037	.189	2.42	1.446
36	部活の終わり時刻が遅くなっても、帰路の安全配慮がなかった。	−.156	.775	.116	−.140	1.84	1.064
37	身体の不調や病気のときでも、部活を休む許可や医師にかかる許可をもらいにくかった。	.243	.760	−.010	−.114	1.71	1.117
23	過酷な部活のせいで心身を害しても、自己責任にされた。	.467	.638	.010	−.167	1.76	1.185
18	部活動をすることが最も大切なことで、そのためにはほかの色々なことを犠牲にしなくてはならなかった。	.282	.535	−.036	.142	2.18	1.264
34	入部時には、良い点ばかりを強調して、実際の不都合なことを隠して説明があった。	−.122	.506	.202	.000	1.61	.969
16	顧問や部で、責められるときは、弁明・反論できる機会が十分に与えられない。	.080	.475	.269	.009	1.73	.993
13	部活によって精神的に追い込まれ心のバランスを崩す人がいた。	.207	.465	−.044	.158	2.29	1.338
29	部員の個人的発達や特性を考慮せず、一斉に指示された。	−.275	.068	.730	.061	1.73	.948
15	顧問は、部員の活動を不当に低く評価をしていた。	−.015	.046	.661	.005	1.68	.939
6	顧問は、本来の部活動には関係ない雑用や私用を強制することがあった。	.156	.027	.636	−.046	1.72	1.007
7	顧問や先輩の指導や指示がおかしいと思っても、その思いを言うと、その後の部活で不利益を被りそうだった。	.186	.075	.498	.167	2.12	1.181
17	顧問の指導や部活の考え方や指示に対して、納得のいかないことが多かった。	−.193	.313	.495	.160	2.19	1.185
9	部活で自分がやりたい内容や役割があっても自分の意思で選ばせてもらえなかった。	.013	.011	.443	.339	2.15	1.025
8	部活をしてない生徒に対して冷たい先生がいた。	.284	.064	.421	.036	1.84	1.036
10	顧問は部員の個人の意見はわがままと見なして軽視された。	.380	−.157	.414	.111	1.76	.931
3	家族は部活の方針を受容して批判せず、顧問の指示指導や活動を全面的に支持・協力しなければならなかった。	−.104	.369	.384	.134	1.61	.861
5	自分の本心は部活内では怖くて言えなかった。	.068	.235	.381	.262	1.83	1.113
32	顧問は部員によって、えこひいきをしていた。	.212	.198	.294	.036	2.20	1.274
56	顧問や先輩の指示には絶対に従わなければならなかった。	−.156	−.090	.352	.580	2.74	1.268
2	校則や部活のルール違反者がでると、連帯責任として全員で罰則を受けた。	−.095	−.020	.202	.465	1.99	1.324
22	自分のミスや技能不足で部活のみんなに迷惑をかけていると叱られた。	.213	.355	−.150	.447	1.93	1.306
11	返事をするときなどは全員で声をそろえたり、独特の言い回しがあったり、軍隊のようなルールがあった。	.122	.173	.059	.315	2.33	1.358

教員の負担軽減や指導の専門性を考慮して部活動指導員を採用している教育現場では，メリットだけでなくデメリットとして（1）部活動指導員は兼業しながら活動しているため，休日または勤務終了後の限られた時間の参加になること（2）指導員がつく時間には教員も顧問として参加する必要があるため，負担軽減とはならないこと（3）技術指導力向上の一方，部活外の生徒の学校生活場面やその文脈を熟知してないことから心情面などに対しての配慮が難しいことなどが挙げられている（滋賀報知新聞，2018）[28]。

こういった部活指導の混乱に一定の指針を与えるために藤後ら（2020，2022）[29, 30]は，基礎編では，指導員の学校組織内での位置づけと学校組織の一員として必要な知識，子どもの発達に沿った指導，部活動マメジメント，安全対策など外部指導員が身につけておくべき基本知識から指導の要点をまとめており，さらに応用編として部活動集団の指導方法や生徒の個々の特性の理解と指導方法にまで詳細に言及している。

しかし，部活についてはその活動指針等について学校間の格差や学校内の部活間の差が大きい。各学校の部活動の状況を鑑み部活動の利点を生かす健康度の高い集団活動を展開するために，部活動の健康度を評価する指標を明らかにする必要がある。

1.　予備調査

方　法；調査期間 2021 年 3 月 -4 月調査目的と対象；部活の健康度とその学校適応への有用性を測る項目収集を目的に，現役の中学・高校教師（38 名）・中学・高校の運動部員（62 名内；個人競技 22 名，団体競技 40 名）・文化部部員（活動頻度が週 3 回以上の部員 26 名）の協力を得て研究Ⅰで得た部活での不合理経験 61 項目各項目について前尺度の顧問の指導力，部活内の集団圧力に加えて，部活の有用性，チームワーク，参加選択の自由度の観点としての開放性といった観点をもとに項目表現の修正･加筆を求めた。その結果 48 項目を得た。得られた 48 項目について，筆者らと部活経験を有する大学生 12 名により項目の分離統合を繰り返し，最終的に 20 項目を選定した。

2.　本調査

方　法；調査期間；2021 年 7 月 GoogleForms 上に作成したアンケートフォームに回答を求めた。調査対象；関西の私立大学生 180 名（中学・高校時代の部活動経験に基づき回答を求め，回答の不備が無い 148 名分の回答を分析対象とした。質問紙の構成；・性別（男性 69 名女性 79 名）・調査時の対象者の所属学年（1 年生 27 名 2 年生 76 名 3 年生 33 名 4 年生 12 名）・中学・高校時代に所属した部活動の種類（運動部 80 名・文化部 55 名・無所属 13 名）

使用尺度；予備調査で得られた部活健康度尺度 22 項目，学校生活への適応スキルに関する 22 項目（太田，199231）を基に作成）

3.　結果と考察

各項目について，天井効果および床効果の有無を確認した。その結果，いずれの項目も平均値に 1SD を加減した際に最大値（4）および最小値（1）を超える項目は無かった。したがって，

天井効果および床効果は生じていないと判断し，この段階において削除した項目は無かった（表3参照）。

次に，部活の健康度指標の構造を明らかにするために因子分析（プロマックス回転　最尤法）を行い，複数の因子に負荷を示した「4. 顧問の先生は，活動のある時は必ず来る」を削除し，5因子解を得た。

第1因子4項目は,「13. 部活動に参加して, 短時間でも集中して勉強できるようになった。」「12. 部活動に参加して，だれとでも話せることができるようになった。」「14. 部活動に参加するとストレスが発散できる。」など部活への参加による成果が学校生活の諸側面に与える有用な成果を示していることから「部活の成果」と命名した。

第2因子4項目は,「3. 顧問の先生は，部活動について部員全員の意見を平等に聞く。」「2. 顧問の先生は，部員全員に試合など発表の機会を平等に与える。」「5. 顧問の先生は，部活動を勉強とのバランスを配慮して調整する。」などの顧問の専門的性や合理的な指導に関する項目から構成されていることから「顧問の専門性」と命名した。

第3因子3項目は,「8. 同学年のメンバーも助け合う。」「7. 後輩はわからないことを先輩に聞く。」「6. 先輩は後輩のことを考えてアドバイスする。」「15. 先輩後輩関係なく部活動で問題だと思うこ

表3　部活の健康度尺度の各項目と記述統計

項目番号	項　　目	平均	標準偏差
1	顧問の先生は、部活動の内容について専門的な知識と技術を持っていた。	3.167	.982
2	顧問の先生は、部員全員に試合など発表の機会を平等に与える。	3.014	1.064
3	顧問の先生は、部活動について部員全員の意見を平等に聞く。	2.813	1.122
4	顧問の先生は、活動のある時は必ず来る	2.810	1.084
5	顧問の先生は、部活動を勉強とのバランスを配慮して調整する。	3.097	.999
6	先輩は後輩のことを考えてアドバイスする。	3.104	.966
7	後輩はわからないことを先輩に聞く。	3.063	1.032
8	同学年のメンバーも助け合う。	3.292	.981
9	部活動に参加していても自分がみじめに思えるだけだ	2.653	1.124
10	先輩のいうことは絶対でさからえない	2.241	1.088
11	部活動に参加していると自分の技術が向上する	3.148	.945
12	部活動に参加して、だれとでも話せることができるようになった。	2.431	1.022
13	部活動に参加して、短時間でも集中して勉強できるようになった。	1.958	.996
14	部活動に参加するとストレスが発散できる。	2.535	1.158
15	先輩後輩関係なく部活動で問題だと思うことは自由に意見が言える。	1.975	.956
16	部活動への遅刻・欠席・早退は報告さえすれば自由にできる。	2.860	1.039
17	部活動への参加・脱退は報告さえすれば自由にできる。	2.910	1.134
18	部活動は、複数のかけもち参加も自由である	2.208	1.251
19	部活動は、決まりのユニホームなどを強制的に買わされる	2.629	1.271
20	校外での部活動（試合・発表など）には自分が出なくても参加しなければならない。	2.811	1.256

n=144　　min=1max=4

とは自由に意見が言える。」など部活内の部員が学年の隔たりを超えて支え合うことを示す項目から構成されていることから「チームワーク」と命名した。

第4因子5項目は,「10. 先輩のいうことは絶対でさからえない」「19. 部活動は，決まりのユニホームなどを強制的に買わされる」「20. 校外での部活動（試合・発表など）には自分が出なくても参加しなければならない。」など全体主義的な圧力による強制を示唆する項目から構成されていることから「強制圧力」と命名した。

第5因子3項目は,「17. 部活動への参加・脱退は報告さえすれば自由にできる。」「16. 部活動への遅刻・欠席・早退は報告さえすれば自由にできる。」「18. 部活動は，複数のかけもち参加も自由である」など部活動参加について生徒の任意性が保証された開放的活動であることが示唆される項目から構成されていることから「開放性」と命名した（表4参照)。

因子分析で得られた各因子を下位尺度とし，学校生活の諸側面との関連性を検討するため学校生活スキルについても構造を検討した（表5参照)。

部活の健康度尺度の因子分析の結果第1因子は他者との円滑な対人関係を通じて社会性を獲得する項目から構成されていることから「向社会的スキル」第2因子は民主的な集団活動やチームワークに寄与する項目から構成されていることから「集団活動スキル」第3因子は，教科学習を合理的に展開するために有用な項目から構成されていることから「学習スキル」と命名した。

以上部活の健康度尺度5因および学校生活への学校適応スキル3因子のα係数が信頼性水準を満たしていることを確認し，合計得点を以後の分析に用いた。

性差による尺度の測定値の差異を検討するため性別を独立変数，部活の健康度尺度の測定値を従属変数としてt検定を行った結果,「民主制」において女性の方が男性よりも有意に高かった（t（137）＝3.58, p＜.001.)。

表4　部活の健康度尺度の因子構造と記述統計

項目番号	項　目	部活の成果 α＝.771	顧問の指導力 α＝.771	チームワーク α＝.789	強制圧力 α＝.650	開放性 α＝.686	平均	標準偏差
13	部活動に参加して、短時間でも集中して勉強できるようになった。	.871	-.194	-.135	.030	.033	1.958	.996
12	部活動に参加して、だれとでも話せることができるようになった。	.712	-.010	.136	.154	-.011	2.431	1.022
14	部活動に参加するとストレスが発散できる。	.625	.084	.005	.021	.084	2.535	1.158
11	部活動に参加していると自分の技術が向上する	.483	.137	.146	.162	-.124	3.148	.945
3	顧問の先生は、部活動について部員全員の意見を平等に聞く。	-.053	.810	-.041	-.145	-.026	2.813	1.122
2	顧問の先生は、部員全員に試合など発表の機会を平等に与える。	-.019	.757	-.032	.084	.116	3.014	1.064
5	顧問の先生は、部活動を勉強とのバランスを配慮して調整する。	.091	.695	-.094	.005	.003	3.097	.999
1	顧問の先生は、部活動の内容について専門的な知識と技術を持っていた。	-.204	.539	.239	.211	-.075	3.167	.982
8	同学年のメンバーも助け合う。	-.040	-.132	.860	-.094	.136	3.292	.981
7	後輩はわからないことを先輩に聞く。	.020	.187	.643	-.028	.000	3.063	1.032
6	先輩は後輩のことを考えてアドバイスする。	.186	.037	.571	-.123	.119	3.104	.966
10	先輩のいうことは絶対でさからえない	.176	.122	-.257	.733	-.023	2.241	1.088
19	部活動は、決まりのユニホームなどを強制的に買わされる	.178	-.087	.174	.548	-.103	2.629	1.271
20	校外での部活動（試合・発表など）には自分が出なくても参加しなければならない。	-.082	-.050	.508	.538	-.065	2.811	1.256
15	先輩後輩関係なく部活動で問題だと思うことは自由に意見が言える。	-.296	-.222	-.189	.482	.053	1.975	.956
9	部活動に参加していても自分がみじめに思えるだけだ	-.040	.052	-.316	.473	.226	2.653	1.124
17	部活動への参加・脱退は報告さえすれば自由にできる。	-.063	.016	.116	.047	.857	2.910	1.134
16	部活動への遅刻・欠席・早退は報告さえすれば自由にできる。	.133	.088	.039	.056	.677	2.860	1.039
18	部活動は、複数のかけもち参加も自由である	-.003	-.082	.097	-.236	.437	2.208	1.251

n=144　　min=1max=4

表 5　学校適応スキル因子分析と記述統計

項目番号	項　目	向社会的スキル	集団活動スキル	学習スキル	平均	標準偏差
10	その場の雰囲気に応じて会話に参加する	.681	.064	-.014	3.176	.863
8	困っている友達や悩んでいる友達がいたら助ける	.646	.047	-.029	3.459	.684
6	人との関係（仲良さ）に応じて、してもらいたいことを頼む	.625	-.217	.012	3.209	.867
7	なにかしてもらったときは誰に対しても感謝の気持ちを言葉に出して言う	.579	-.021	-.072	3.716	.572
9	初対面の人でも自己紹介や話をする	.514	.162	.072	2.932	.926
18	友達とトラブったとき、いろんな方法を考えて和解する	.493	.183	-.043	3.048	.847
5	苦手な教科の勉強や解らないところは友達に教えてもらう	.454	-.090	.211	2.858	1.094
17	何か失敗したときに、すぐに謝る	.448	.029	-.103	3.463	.705
15	多数意見に流されず冷静に状況を判断できる	-.155	.869	-.081	2.735	.953
14	グループ活動で納得のいかないことについては意見を言う	.079	.608	-.026	2.608	.980
16	あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理する	.153	.571	-.005	2.615	.892
12	グループ活動で苦手な人ともチームワークのために連携する	.066	.539	.110	3.014	.868
19	不安や怖さを自分なりに処理できる	-.053	.471	.128	2.748	.992
1	どの授業でも集中して聴く	-.145	.084	.712	2.608	1.001
2	授業では自分の理解に役立てるためにノートをとる	-.006	-.048	.598	3.047	1.045
4	部活で疲れていてもレポートや宿題などやるべきことはする	-.058	.093	.490	3.143	.899
3	試験前にはいつもよりも多く勉強時間をとる	.209	-.050	.476	3.047	1.045

n=148

次に，部活の種類による健康度の差について比較するためにt検定を行った。部活の健康度の下位尺度である「独裁性」は，運動部の方が文化部よりも有意に高かった（t（129）＝5.34, p＜.001.）。「民主性」は，文化部の方が運動部よりも高かった（t（132）＝5.83, p＜.001.）（図 1. 参照）。

次に，部活の健康度と学校適応スキルの関連性を検討するために部活別に相関係数を算出した（表 6 参照）。運動部では，「部活の成果」「チームワーク」について向社会的スキルおよび学習スキルとの間に有意な相関が示された。文化部では，「部活の成果」について向社会的スキルおよび集団活動スキルとの間に有意な相関が示された。

以上の結果から，部活の健康度尺度は，学校適応に必要なスキルとの関連性が示唆された。今後は調査対象者と生徒の人権意識等の指標との関連性を検討する必要がある。

注 1）文部科学省，令和 2 年（2020）「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関

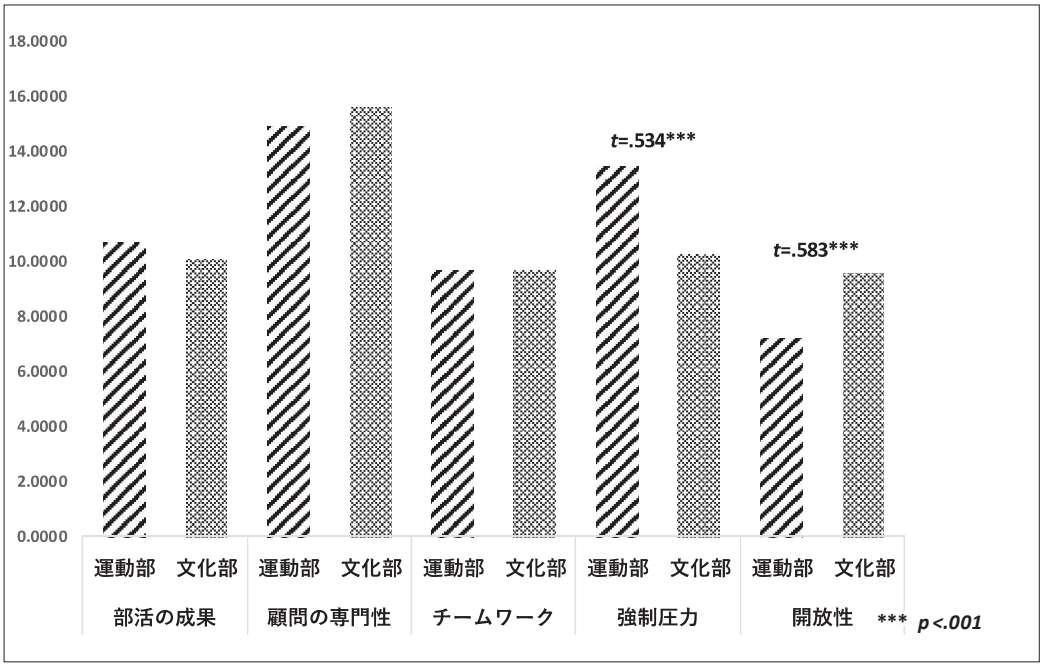

図 1　運動部と文化部の健康度の差

表 6　部活別健康度と学校適応スキルとの相関

所属部活	部活の健康度	向社会的スキル	集団活動スキル	学習スキル
運動部	顧問の専門性	.175	−.125	−.019
	部活の成果	.404**	.132	.468**
	チームワーク	.323**	.136	.252 *
	独裁性	.150	.084	.042
	民主性	.042	−.063	.156
文化部	顧問の専門性	.182	.086	−.108
	部活の成果	.440**	.371**	.268
	チームワーク	.228	.182	.100
	独裁性	.225	−.085	.084
	民主性	−.050	.061	.030

*p<.05 **p<.01

する調査結果の概要」1 いじめ；小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は 517,163 件（前年度 612,496 件）であり，前年度に比べ 95,333 件（15.6 %）減少。児童生徒 1,000 人当たりの認知件数は 39.7 件（前年度 46.5 件）。

※減少理由については，「新型コロナウイルス感染症の影響により，生活環境が変化し児童生徒の間の物理的な距離が広がったこと，日常の授業におけるグループ活動や，学校行事，部活動など様々な活動が制限され，子供たちが直接対面してやり取りをする機会やきっかけが減少したこと，年度当初に地域一斉休業があり夏季休業の短縮等が行われたものの例年より年間授業日数が少ない学校もあったこと，新型コロナウイルス感染症拡大の影響による偏見や差別が起きないよう学校において正しい知識や理解を促したこと，これまで以上に児童生徒に目を配り指導・支援したこと等により，いじめの認知件数が減少したと考えられる。」としている。

2　暴力行為；小・中・高等学校における暴力行為の発生件数は 66,201 件（前年度 78,787 件）であり，前年度から 12,586 件（16.0%）減少。児童生徒 1,000 人当たりの発生件数は 5.1 件（前年度 6.1 件）。いじめの認知件数と同様に，新型コロナウイルス感染症による学校生活への影響が，暴力行為の件数の減少につながっていると考えられる。

3　長期欠席；「新型コロナウイルスの感染回避」により 30 日以上登校しなかった児童生徒数は，小学校 14,238 人，中学校 6,667 人，高等学校 9,382 人となっている。

（長期欠席のうち小中学校における不登校）

小・中学校における不登校児童生徒数は 196,127 人（前年度 181,272 人）であり，前年度から 14,855 人（8.2%）増加。在籍児童生徒に占める不登校児童生徒の割合は 2.0%（前年度 1.9%）。過去 5 年間の傾向として，小学校・中学校ともに不登校児童生徒数及びその割合は増加している（小学校 H27：0.4%→ R02：1.0%，中学校 H27：2.8%→ R02：4.1%）。

不登校児童生徒数が 8 年連続で増加，約 55%の不登校児童生徒が 90 日以上欠席している。

4　中途退学；高等学校における中途退学者数は 34,965 人（前年度 42,882 人）であり，中途退学率は 1.1%（前年度 1.3%）。中途退学者数は，平成 25 年度以降，平成 30 年度に増加したほかは毎年減少している。

5　自殺；小・中・高等学校から報告のあった自殺した児童生徒数は 415 人（前年度 317 人）で，調査開始以降最多となっている。児童生徒の自殺が後を絶たず大幅に増加していることは，極めて憂慮すべき状況である。

引用文献

１）文部科学省 , 平成 29 年（2017）「生きる力」第 5 章　特別活動 中学校学習指導要領
２）狩野素朗・田崎敏昭（1990）学級集団選癖の社会心理学　ナカニシヤ出版
３）文部科学省 , 平成 20 年（2008）中学校学習指導要領　総則
４）文部科学省 , 平成 30 年（2018）第 1 章 総則 第 4 の 2 学習指導要領「生きる力」中学校学習指導要領
５）内田 良（2017）ブラック部活動 子どもと先生の苦しみに向き合う 東洋館出版社
６）日本スポーツ振興センター（平成 27（2019））学校の管理下の災害［平成 26 年版］
７）尾見康博（2019）日本の部活（BUKATSU）文化と心理・行動を読み解く　ちとせプレス
８）石村広明・田里千代（2017）「スポーツ集団における体罰についての一考察―野球部とカルト宗教集団との類似性を手掛かりに―」,『天理大学学報』, 第 68 巻第 3 号, p.63.
９）文部科学省（平成 25 年（2013））「運動部活での指導のガイドライン」
10）スポーツ庁（平成 30 年（2018 年）「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」
11）「中 1 自殺 , 両親が市提訴　再調査でいじめ認定―名古屋地裁」https://www.jiji.com/jc/article?k=2022071901108&g=soc（2022/8/20 参照）
12）「高校部活でいじめ疑い　重大事態認定で調査 , 三重」
https://news.yahoo.co.jp/articles/ab5dfcaf43e93da5f9e9c1dca113fd1c356ba0c8（2022/8/20 参照）
13）長谷川祐介（2013）高校部活動における問題行動の規定要因に関する分析の試み - 指導者の暴力, 部員同士の暴力・いじめに着目して - 大分大学教育福祉科学部研究紀要 第 35 巻第 2 号 pp153-163
14）山口裕幸（2008）. チームワークの心理学：よりよい集団づくりをめざして サイエンス社
15）Rousseau, V., Aube, C., & Savoie, A.（2006）.Teamwork behaviors: A review and an integration of frameworks. Small Group Research, 37, 540-570
16）西田公昭（2009）社会集団の健康度診断とその事態研究　科学研究費補助金研究成果報告書
17）10）と同書
18）国立青少年教育振興機構（平成 26 年（2014））「青少年の体験活動等に関する実態調査（平成 26 年度調査）」資料集 第 3 章 調査結果集計
19）10）と同書
20）“勝つ” ことがすべてじゃない！ 多様なニーズに応えるイマドキの部活動「ゆる部活」をレポート　スポーツ庁 WEB 広報マガジン　DEPORTARE デポルターレ 2018 年 11 月 15 日版
https://sports.go.jp/tag/school/post-13.html （2022/8/20 参照）
21）清水紀宏 , 春日晃章 , 中野貴博 , 鈴木宏哉（2021）子どものスポーツ格差？体力二極化の原因を問う大修館書店
22）岡田有司（2009）部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響部活動のタイプ・積極性に注目して教育心理学研究 57,419-431
23）坂西友秀（1993）クラブ活動と人間関係　宮川充司・坂西友秀・大野木裕明（編）児童・生徒の発達と学習ナカニシヤ出版 109-116.
24）吉村斉（l997）学校適応における部活動とその人間関係のあり方自己表現・主張の重要性教育心理学研究 45,337-345
25）角谷詩識（2005）部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから発連心理学研究 ,16,26-35.
26）５）と同書
27）スポーツ庁（平成 29 年（2017））「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の施行について（通知）」
28）滋賀報知新聞（2018）部活動指導員制度 メリットとデメリット

29）藤後悦子 , 大橋 恵 , 井梅由美子（2020）部活動指導員ガイドブック［基礎編］
30）藤後悦子 , 大橋 恵 , 井梅由美子（2022）部活動指導員ガイドブック［応用編］
31）太田仁（1992）学校教育における社会的スキルの研究　関西大学大学院
※本論文中

Abstract

Bukatsu (school-based extracurricular activities) is associated with school adjustment and motivation for various activities and is at the center of the real lives and consciousness of junior high and high school students (Kano & Tasaki, 1990) [2]. However, despite repeated guidance by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, serious problems such as bullying in Bukatsu , resulting in non-attendance, expulsion from school, and even suicide, continue to occur.

Study I examined unreasonable guidance in *Bukatsu* and identified four structures: “coercive control by coaches,” “deprivation of private life and its suffering,” “abuse of power,” and “totalitarian climate.” In Study II, focusing on the usefulness of *Bukatsu* for school life in addition to Study I, the *Bukatsu* Health Measuring Scale was developed, which consists of five factors: “*Bukatsu* achievements,” “coach leadership,” “teamwork,” “coercive pressure,” and “openness.” To measure the validity of the scale, the study examined its relationships with 22 school adjustment skills consisting of the three factors: “prosocial skills,” “group activity skills,” and “learning skills.” The results showed that in the athletic *Bukatsu*, “*Bukatsu* achievement" and "teamwork" were significantly correlated with prosocial skills and learning skills. In the non-athletic Bukatsu , significant associations were found with prosocial skills and group activity skills with respect to “*Bukatsu* performance.”

Keywords: *Bukatsu* , violation of human rights by coaches, teamwork, *Bukatsu* Health Measuring Scale